雷神、翔ぶ

丸山健二

文春文庫

281—4

雷神、翔ぶ

定価はカバーに
表示してあります

1988年8月10日　第1刷

著　者　丸山健二
発行者　西永達夫
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL　03・265・1211
落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。
印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-728104-X

文春文庫

雷神、翔ぶ

丸山健二

文藝春秋

雷神、翔ぶ

试读结束：需要全本请在线购买： www.er

☆

雷村を遍く覆っていた深いしじまを最初に破ったのは、潑剌として大胆不敵な産声だ。それは苔むした緑の谷底から噴煙のような勢いでわきあがり、周辺の切り立った崖や山々に幾度となくぶつかって増幅され、七月のきらめく大気を震わせながら、四方八方へと飛び散ってゆく。その子はおそらく、いたずらに母親を苦しませることも、老いぼれた助産婦をむやみに手こずらせることもなく、夜明けと同時にすんなりとこの世へ飛び出してきたのだろう。そして今は、窓ガラスや障子をいとも簡単に貫いてきた強烈な暁光と、ヒノキのたらいに張られた人肌と同じ温度の湯と、居住まいを正したおとなたちの感に堪えない視線とを浴びて、手足のほかに顎門を動かしたりしながら、生きている証しをさかんに示しているに違いない。果してどんな子が生れたのだろうか。よしんば非の打ちどころがない元気な赤ん坊であっても、親の期待に反して男ではないかもしれないし、村人の誰もがなぜか忌み嫌う双生児かもしれない。い

ずれを問わず、もはや私の知ったことではない。雷村とかかわるのはこれが最後だ。

岩肌が裸出している山の頂きにどっかと腰をおろした私は、いつになくくつろいだ気分で、山と谷とが織り成す一連の単調な光景を眺めている。この季節にしては珍しく大気が透徹しており、そのために三六〇度の視野が開け、海原を埋める波のようにゆるやかにうねる地勢を、ほぼ限界まで見渡すことが可能だ。私の眼が次々に捉える物象のすべてが、精気に満ち満ちた鋭くてまばゆい光彩をふんだんに放ち、充溢へと向っている。

天と地の隅々までをしかと見るが、目下のところ雨の気配は微塵も感じられない。この分だと晴天は一日中つづき、大地を揺るがして樹齢百年を越える巨木を八つ裂きにするほどの雷はおろか、一滴の雨さえないかもしれない。そして私は、活殺自在の力を持つと噂されているあの伝説の雷神をただの一度も目撃することなく、静かに立ち去るのだろうか。それでもかまわない。少しも残念だとは思わない。第一私は、信じている者にしか見えないなどというあの手の話を真に受けるほど愚かでは……いや、できることなら見たい。いや、ぜひとも見たい。

私をぐるりと囲んでいる、地平線とも水平線とも呼べない、とてつもなく長い線の湾曲がはっきりと認められる。つまり、この世の果てを、この惑星のへりを感知することができる。もし手元に二〇〇ミリ程度の交換レンズがあれば、数百キロ先に横たわる海を、空よりも一段と青い平面として引き寄せられるだろう。けれども、残念ながらきょうの私はレンズ一本、カメラ一台持参していない。ここにこうしているのは写真家になりたくてもなれず、とうとう諦めてしまった四十男——正しくは三十九歳と十ヵ月だが——だ。だからといって後悔らしい後悔

はなく、あるのはむしろ、肩や背中に容赦なく食いこむ重い撮影器材から解放された喜びばかりだ。

過去四年のあいだ頻繁にこの山村を訪れ、数え切れないほど写真を撮ったことが、今にして思えば嘘のようだ。だが、それは紛れもない事実で、少ない月でも三回はここへ通ったものだ。フィルム代やガソリン代に不自由しない身分で、しかも所帯を持っていなかったら、入り浸りではなかっただろうか。ひょっとすると、住み着いてしまったかもしれない。せっせと働いて僅かな金を作ると、私はまるで逃げるようにして家を飛び出し、真っすぐここへやってきた。ぼろグルマに充分な器材とぎりぎりの食料を積みこみ、飲まず食わずで五時間以上もぶっ通しに走り、到着するやいなやせかせかと歩きまわった。私にとってここは被写体の宝庫で、訪れるたびに思わず叫びたくなるほどの発見がどっさりとあり、それは際限がないように思えた。

雷村に注目するようになったきっかけはといえば、道端で財布を拾ったのと同様、まったくの偶然にすぎない。あの頃の私は野鳥一辺倒で、ヤツガシラに的を絞って追っているうちにここへ足を踏み入れてしまったのだ。そして気がついたときには、無数の杣山（そまやま）と幾筋もの渓流を呑みこんだ雷村のど真ん中にぽんやりと立っていた。あの日のことは忘れていない。残っている記憶は何から何まで鮮やかだ。アメリカインディアンの羽根飾りを想わせるような頭を持ったヤツガシラには、結局出くわさなかった。もっとも、あれほど珍しい鳥がそう簡単に見つかるわけがない。その代り、つがいのアオバトとイカルの大群を8×10（エイトバイテン）できちんと撮ることができ、それはそれで大した収穫だった。なかでもイカルの写真が素晴しく、黄色くて立派な嘴と

淡紅色のヤマザクラの花との調和が申し分ないほど見事だった。

しかし、本当の成果はほかにあったのだ。曲りくねった険しい山道を下って、役場と公民館に面した正方形の広場へ達したとき、私は思わず息を呑み、足をとめた。雑草が攻めこんでこないように白い砂を分厚く敷き詰めた広場に、ヤマザクラとは明らかに種類の異なる古木が一本、いかつい根を縦横無尽に張り巡らし、長くてしなやかな枝を地面に向って垂らしていた。満開の花の色は血のように赤く、方々の谷から集まってくるひんやりとした風を受けてかすかに震えていた。あたりには均質な静寂がみなぎっていて、晩春の真昼時の玄妙な陽光がいたるところで渦を巻いていた。

ただそれだけのことだったら、私は広場の片隅に停めておいたクルマに乗りこんで県道を引き返し、国道から高速道路へと出て真っしぐらにわが家へ帰っただろう。そして、ヤツガシラが棲息しているという確実な情報を得ない限り、雷村には二度と近づかなかっただろう。

巨大な噴水に似ているその枝垂れザクラの下には、いくたりかが坐っていた。私は初めのうち、全員がおとなではないかと思った。ついで、おとなのなかに子どもがまじっているように見えたが、しかしすぐにそれが子どもだけの集まりだとわかった。おとなの姿はどこにも見あたらなかった。まだ年端もゆかぬ子どもが莚(むしろ)の上に端座し、神妙な顔つきで輪になっていた。私は少しずつそっちへ近寄って行った。立って歩けるようになってからまだまもない子が五人と、かれらよりいくらか年上で、体もひとまわり大きい女の子の計六人が、絶え間なく散る花びらの真っただ中にちょこなんと坐っていた。

小綺麗な身なりをしたかれらの前には、黒い重箱が五つ六つ並べられ、ひとりひとりに小皿と箸と湯呑み茶碗があてがわれていた。母親のような仕種で給仕しているのは年上の女の子で、彼女は重箱の中身を器用な手つきで取り分け、魔法瓶を傾けてお茶を注ぎ、箸がうまく使えない子を助けてやっていた。誰もが落着き払い、悪ふざけをする者はなく、おとなでもちょっと真似られないほど上品な食べ方をし、ときおり稚けない笑声をばらまくのだった。

すると、それまで胸のうちをいっぱいに占めていた数々の野鳥が一斉に飛び立ち、あっという間に私から離れ、最大の目標だったあのヤツガシラでさえも瞬時にして消えてしまった。入れ替りにどっとなだれこんできたのは子どもだけによる花見だった。やがてかれらは声を合せて、私の知らない歌を唱い始めた。その哀調を帯びた歌声は五月の大気を震わせ、枝垂れザクラを震わせ、なかんずく私の魂を震わせた。いつしか私はそっちへカメラを向けており、ありったけのフィルムを使っても尚撮り足りない思いが残り、日が落ちてサクラの下に誰もいなくなってからもまだその場に佇立していたのだ。

焼きあがった写真を見た妻は、「どうしてえ?」を連発しながら、しきりに目頭を押えたものだ。どうしてその写真が涙を誘うのかさっぱりわからないと言いながら、いつまでも泣いていた。そんな彼女を見たのはあとにも先にも一度だけだ。あの晩、聞いてくれる者など誰もいない浴室のなかで、首まで湯に浸りながら、私は厳然と言い放った。

「鳥はやめだ。鳥なんてくだらん」

试读结束：需要全本请在线购买： www.er

サクラといっしょに写した六人の子どものうち、一番幼なくてまだ赤ん坊だったひとりが、およそ二年後に他界している。病死でもなければ事故死でもない。殺されたのだ。しかしほかの子どもは無事で、五人とも順境に育ち、恐ろしいほどの速さで成長をつづけている。甲斐甲斐しく年下の子どもの世話をしていた女の子は、今ではもう小学生で、住み荒らされた家くらいにしか見えない粗末な分校へ元気に通っている。

すでに私はあの子のことをよく知っている。名前も境遇も知っているし、注意して見ないとわからない程度のせむしであることも知っている。また、ほかの子どもやおとな、つまり村民全員について知っている。なにしろ四年ものあいだ、四季を通して、昼夜の別なく、カメラを抱えてうろつきまわったのだ。これまで私に撮られていない村人は、せいぜいひとりかふたりくらいだろう。

なみなみならぬ関心を持って私が狙ったのは、なにも生きている人間ばかりとは限らなかった。生れたての赤ん坊に傾けた情熱を、そのまま今度は息を引き取った直後の年寄りに注いだものだ。最初の半年間はだいぶ手こずった。よそ者の出現と徘徊に戸惑った村人たちは、極度に緊張し、臆し、なかには私が近づいただけでもいたたまれなくなって逃げ出す者までいた。写真といえば記念写真のことしか念頭にないかれらは、カメラマンという職種はおぼろげに知っていても、正確な仕事の中身までは理解していなかったと思う。今でも本当にわかっているのはほんの数人だろう。

やがてかれらは素性の知れない私にも大げさなカメラにも馴れ、その分だけ仏頂面が減って、

取ってつけたような愛想笑いを浮かべる者が増えた。注目を浴びることの心地よさがすっかり病みつきになったのと、ポラロイドカメラで撮ってやった写真をその場で進呈するサービスが功を奏したせいに違いない。かくして一年後には、それ以上は望むべくもない完璧な形で、私は雷村に受け入れられたのだ。しかし、都会からのべつやってくる変り者という評価は、四年のあいだ同じだったと思う。

かれらは打ち解けた途端、私に向ってぶしつけな質問を次から次へと浴びせかけた。私が返事を渋るのを百も承知で、身上調査の何倍も立ち入ったことをずばずば訊いてきた。もっとも、それは私のカメラほど無礼ではなかったかもしれない。私は正直に答えた。妻とふたりの息子のこと。写真だけでは食べてゆかれない立場。勤めに出て家計を助けている妻。アルバイトのような仕事で得る私の収入の大半が、フィルム代と現像代、それに器材購入費とガソリン代にまわされてしまうこと。だが、赤貧に悩むところまではゆかなくても、勝手向きがよくない村人の眼には、道楽に入れ揚げている男としか映らなかったに違いない。

かれらが最も好むのは愚痴の類いの話で、希望とか夢とかについて喋ると急に不機嫌になり、口数が減るのだった。いつの日か雷村をテーマにした写真展を開き、同時に写真集を出版し、それを機に写真家として一挙に売り出し……今となってはどの計画も失敗し、どの夢も破れたことを率直に認めなければならない。写真集を出すのは実に簡単だが、ただし印刷した本全部をそっくり自分で買い取らなければならない。ましてやスポンサー無しでの写真展など夢のまた夢だ。

私が苦労して撮った野鳥の写真を使ってくれる雑誌は二、三あったが、しかしそこから支払われる金は足代にもならなかった。野鳥専門の写真家など少しも珍しくなく、スライドのストックが私の十倍という者も大勢いた。かれらと私の差は要するに経済力のみで、かれらには資金がたっぷりとあって、私にはそれがないというだけのことだった。しかも私ときたら、商売になる唯一の被写体、野鳥をやめてしまったのだ。鳥から人間へと主題を切り替えた私は、懇意にしていた編集者――彼のほうでは私のことなど何とも思っていなかったかもしれない――に会って、手始めに雷村の写真を見せた。

「素晴しいじゃないか」と彼は言ってくれたが、その口調はぞんざいだった。「大したもんだよ。上出来だぞ。でもなあ、うちで欲しいのはこういう写真じゃないんだ」

もっと金になる写真を撮ったほうがいい、と親切に忠告してくれる者もいた。動物や植物、風景や星座、話題の事件とその関係者の素顔。一時のあいだ、私はふた股かけてみた。野鳥を三分の一、雷村を三分の二、だいたいそんな力の配分で追ったのだ。けれども、ひとたび私から飛び去った鳥たちは二度と戻らなかった。夢にまで見たあの幻の鳥ヤツガシラを遂に発見し、余裕をもってシャッターが切れる場所まで近づけたのに、私はカメラを向けなかった。すぐにでも売れる被写体だとわかっていながら、素早くその場を立ち去り、呑み代がなくなったときでも思い出すようなことはなかった。

鳥は所詮鳥でしかないが、しかし人間はそうではない。とりわけ雷村の人々は違っていて、ときとして人間以上の存在に見えることがあり、その一瞬を捉えるために、私は辛抱強く狙い

をつけたのだ。かくも長きあいだ。だが、四年を経た今それも終った。写真に関する何もかもが終った。だからといって、鳥の場合と同じようにして人間にも厭きてしまったのではないし、また、更に魅力的な道楽に巡り合いたいと願っているわけでもない。

きょう私が持ってきたのはナップザックひとつで、なかには水筒とナイフと食べ物しか入っていない。麓に停めてあるライトバンの荷台も空っぽだ。家にもカメラ一台置いてない。貧乏な私が長年かけて買い揃えた高価な器材は、たった半月のあいだに消えてしまった。きのうの午後までに、まるで古道具のようにして一切合切を叩き売ってしまった。年長の息子が泣いてまで欲しがった全自動カメラでさえ二束三文で手放したのだ。また、私が自分で作った8×10（エイトバイテン）も、記念に残しておけばと言って遠慮する友人に無理矢理買わせた。だからわが家にはもう写真に関係した品物はなく、スライド一枚なく、どこをどう捜しても私が写真家をめざしていた証拠はひとかけらも見出せないはずだ。

昨夜私は、がらんとした八畳間をしげしげと見つめ、そっと呟いた。

「ああ、これでせいせいした」

その直後に私は、長いあいだ自分自身を欺いてきたことを翻然と悟り、かなりきつい衝撃を感じたあと、ひとしきりわけのわからない脅威にさらされ、しまいにはむかっ腹を立てた。カメラを振りかざして鳥を追いかけるなんて、近頃では小学生でもやっていることではないか。私はいい歳をして子どもの遊びの延長に熱中してきたのだ。さまざまな種類のカメラとレンズを駆使して現実を四角い形に切り刻み、閉じこめる。何といういじましさだ。

そうやって、貴重な時間と金を注ぎこんでフィルムに写し取った薄っぺらな世界は、間抜けな絵画よりひどい代物である場合が多かった。これまでの私は、この世の中枢や核心に迫る重要な条件をすべてファインダーの外へ押しやり、絵空事のなかに浸ることばかり考えてきた。つまり、息をとめてシャッターボタンを押す私自身も生きている人間だというありふれた事実を、うかつにも、もしくは意識的に忘れていた。

雷村に在住する三百数十名の人々は、かれら一流のしぶとさと、ときにはあてつけがましく思えるほどの勢いとを以て、確実にこの世を生きている。当惑顔など滅多にお目にかからないここでは、誰もが間違いなく生きている。あるいは、ほかの村や町で暮している無数の他人や、あるいはまた私の妻子や友人たちにしてもだ。おかしいのは私ひとりかもしれない。幾度となく足を運んで村人に接近を図り、ほどなくきわめて親密な間柄になり、方言まで自在に操れるようになったからといって、かれらと同じ程度に生きていることにはならない。

私がクルマのなかで眼を醒ましたのは、黄金色の昧爽が訪れる寸前のことだ。雷村に到着したのは露が降り始めた真夜中だったから、睡眠は充分にとった。家を出るとき妻が渡してくれた魔法瓶のコーヒーをたてつづけに三杯飲み、それからキャラバンシューズに履き替え、昼飯を入れたナップザックを背負い、あとは樵の道を通って一気にこの山嶺まで登ってきたのだ。

雷村を訪れるたびに、私はまずここへきて、真向いに聳える塔のように細長い禿げ山を眺めながら、一日の予定を立てたものだ。どこへ行ってどんな写真を撮るか大ざっぱに決めてから

動く、それが習慣になっていた。なにしろこの村は広い。平坦地はほとんどないのに地図上の面積は相当なもので、互いに反目し合っている周辺の村の四、五倍は優にある。そのくせ舗装されている道は役場の前で行きどまりの県道一本のみだ。

あとは農道と林道だが、どれもくねくねと曲りくねっているうえに勾配がきつく、まとまった雨が降るたびにどこかしら崩れる道ばかりだ。梅雨時には四輪駆動車でも心もとない、と村長は言った。私はここではクルマを一切使用しないことに決めている。徒歩のほうが安全で、また、いい写真を撮るためにも好都合だった。重い器材を背負って、汗まみれ埃まみれで、カタツムリのようにのろのろ歩いているうちに、思いもよらない被写体にぶつかることがしばしばあった。

そうはいってもやみくもに歩きまわればいいというものでもなく、初めにおよその見当くらいはつけておくべきだったし、のべつその気になって何かを狙っていなければならなかった。ピクニック気分では十二時間休まずに歩きまわっても収穫がなかった。一台のカメラも持っていないきょうの私の眼は、果して雷村の何を捉えるのだろうか。退屈して一時間後には引きあげているかもしれず、もしくは、月並みな山村に四年も通いつめた自分に腹を立てて、出くわす村人のひとりひとりに八つ当りしているかもしれない。

山頂から天空に向って斜めに突き出し、角度によって男根にも女根にも見える奇岩の尖端に腰をおろしている私の眼は、深い緑に覆われた、険しい地相の雷村全体を追っている。山が高いのではなくて、谷底が低過ぎるのだが、広角レンズをつけて写真に撮ると、足の裏のひび割

试读结束：需要全本请在线购买： www.er